
獅子崎十三の日々

元

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獅子崎十三の日々

【Nコード】

N4774S

【作者名】

元

【あらすじ】

夢の中にあらわれた女神様に言われるまま謎のアンケートに答えた彼、ハードゲーマーの獅子崎十三ししきみそ一七歳は一人異世界へと送られる。

アンケートに書いた3つのチートにより英雄クラスの強さを手に入れるが即死攻撃は勘弁してください。
そんな十三の明日はどっちだ

プロローグ(前書き)

小説初投稿です。

至らない部分が多々ありますが、温かい目で見守っていただけたらさいわいです。

プロローグ

夢を見てるって自覚できる夢

何て言ったっけ？

まあどうでもいい、とりあえず俺は今それを見ている

だってさ、目の前に俺があるんだよ

しかもナイアガラも真つ青の超々々級の俺が

「これってあれだよな、竜の冒険3の最初のやつだよな」

と最近押入れから引っ張り出してやっているゲームの事を思い出す

「ゲームだったらここで女神の質問タイムなんだけどあるわけねえよな、夢だし」

「そんなことないよ？」

「えっ、マジで！？俺ってここまでゲーム脳だったのか……ちつとへこむ」

「男の子でしょう？シャキっとしなさい、シャキっと」

「つつても俺の夢、要するに欲求みたいなもんだしな」

「とんでもねえ、あたしや女神様だよ」

ドリフネタとか今時知ってる奴いんのか？

随分とおかしな夢だな、おい

「君が夢だと思つなら夢でもかまわない、てか夢でいいよもつ」

「まあ仮に女神様だとして何の用？」

「よくぞ言つてくれました！まず最初に聞くんだけど、剣と魔法の世界に行けるとしたら行ってみたい？」

「ん、行きたいっっちゃ行きたい。やっぱそういうの妄想してた時期もあるし」

「それじゃあ話は早い、この紙をよく読んで質問の部分に答えていつて。はいボールペン」

マルバツ形式かまず最初つと「あなたは異世界に行つてみたいですか」か、とりあえずマル

次は「チートつてどう思いますか」、俺はマジじゃないんでマルでいいかな、マルつと

次、「マルを付けた方だけに質問です、あなたが実際に使いたいチートを3つ書いてください」か、3つて地味に難しくね？

とりあえず経験値100倍はどうか、あつたら裏ボスに挑むときとか使いそうだし

それとステータス超強化、んで最後に、最後に……

「……何にしよう」

やっべ、マジで思いつかねえ

どうしようっ？どうするべ？どげんするとね！

よく考えろ、経験値100倍でレベルはサクサク上がるはずだ
ステータスの強化で序盤でも苦戦することはない
ぶっちゃけこの2つあればどんなゲームでもクリア余裕じゃね？
即死系は大体防御アイテムあるだろうし

よし、思い出せ、最近やったゲームかたっぱしから思い出せ
よさそうなシステム、よさそうなシステム

「アイテム合成」はありきたりだし「錬金術」って言っても俺は化学は大の苦手だ、この間の抜き打ちテストもヤバイな

最近の竜の冒険8で始めた「スーパーハイテンション」、はあれ
ぐらいのヌルゲーじゃないとむしろ使えないな
同メーカーの最終幻想でなにかあったか？「ジョブシステム」は最近
近だったら大体あるし……

ただひたすらに悩み続ける、あれもダメこれもダメとやっていくうち
に俺の思考はだんだんとゲームの不満点に対する文句に変わって
いく

だいたいあのゲームのボスキャラ複数回行動とか反則だろ、完全に
運ゲーだぞ運ゲー

まあ転生シリーズもマゾいけど、あっちもマゾいよなWIIZ、あれ
もマゾい

てか金剛騎士と金剛竜のタッグはどうやってても正攻法は無理だろ、
一体いくつレベル上げたと……

そこでふと気がついた

レベル…そうだレベルだよ！

どれだけ経験値を手に入れようとどれだけ強化しようと限界あるじ
ゃん

なら限界がなくなればいいんじゃない？どこまでも強くなれんじゃない？

うん、そうだ、決まりだ。最後は「限界突破」だ！

経験値100倍、ステータス超強化、そして限界突破
これだけあれば問題はないな

「あ、やっと書いたんだ。次で最後だから早くしてね？」

女神様（自称）の急かす声が聞こえる

おお、よく考えたら3つのチート程度で随分悩んだな俺！

次が最後ねえ」と「最後の質問です、あなたのなりたい職業は何ですか」か

「この職業って1つだけ？何個までとか書いてないけど」

「ええ、そこは1つだけよ。ほらサラリーマンがアルバイト禁止されてるみたいなものよ」

「それはかなり違う気がする、けどいいか」

1つだけなら今まで見たことのない奴がいいな、それに俺の好きなキャラと一緒にだし

「ほい、できたよ」

「どれどれ…鋼線使い？なにこれ？」

「鋼線じゃなくてもいいんだけどさ、こう糸とか使って戦うみたいな……？」

「糸か、ちよつと失礼」

俺の額に何やら温かいものが触れる、しばらくするとその感覚はスつ消え去った

「大体わかったわ、鋼線使いね。それじゃあ最後に名前、書いてくれる？」

「ほいほい、名前ね名前。右端で大丈夫か？」

「空いてる場所ならどこでもいいわよ、早くしてね」

さてさて、んじゃ名前書きますかね」

俺の名前、名前は……名前？あれ、俺の名前ってあれ？

俺は　　だよな、なんで名前が出てこないんだ？どうして……

「ほらほらさつさと書いてよ、私にも用事あるんだから」

「あつああ、すぐ書くよ」

覚えてる、知っている、それでも書けない自分自身の名前
喉元まで出かかっているそれが出ない、なぜ？どうして？
わからない、わからない、ワカラナイ、名前、俺の名前っ！

「この子もダメ、なのかな……」

そんな呟きが漏れる

自らの名前を書くことのできない彼に向けられるのは諦めの眼差しだ

クソっどうして出てこないんだ俺の名前、どうして……

今までゲームのキャラにはすべて自分の名前をつけてきた、なら思い出せるはずだ

はずなのに、はずなのに……

なぜこんなにもムキになるのだろう、これは夢でしかないのに

もう諦めよう、そうだ、それがいい、さっさとこの変な夢から覚めてゲームでもしよう

また、最終幻想13の裏ボスでも倒して…

13？じゆうさん、は 大 事 な 数 字 だ

だって、それは俺の、俺の

名前だから！

俺は十三、獅子崎十三だ！

ようやく思い出した自分の名前

もう忘れないように、また無くさないように自分の名を、自分自身を書きこんでいく

「ほら、これいいだろ」

「確かに、それじゃあこれで終わりね。

目が覚めたら頑張ってたね、ムチユ」

最後に投げキッスをして女神は消え去りました

「なんだかな、全然神様っぽくないやアレ。

それじゃあ、俺も寝る、いや起きるか！」

ここから始まります、彼の獅子崎十三の物語（チート仕様）が

プロローグ（後書き）

劇中でのあきらかな矛盾点や
誤字脱字などありましたらご報告お願いします

第1話

異世界へと送り込まれた獅子崎十三、彼が目を覚ますとそこは……
馬車の中でした

「え、え！？な、なに……ここどこだよ！」

なに、何が起きたの？これは夢、それとも幻？

とりあえずお決まりの対処法自分のほつぺたを抓るを実行

ムギユウウウウ

「……痛い、普通に痛い」

どうしよう夢じゃない、夢じゃないよこれ、どうするよ俺

よし、まずできるだけ冷静に現状を把握しよう

周りは荷物だらけ、しかも木箱が多いな段ボールじゃない

てか今気付いた、なんか入口からおっさんがこっち見てる、てかガ
ン飛ばしてる

「おいボウズ、お前何してんだ？」

「…特に何もしてませんが、あえて言うなら昼寝？」

首を傾げて可愛さをアピール！ま、ヤローがやっても気持悪いだけ
なんだけどな

「だとしたらお前さん、なんつう恰好で寝てんだよ」

「なんつう恰好といわれても、って！

ああああああ！忘れてた！」

ご説明しよう、現在の俺の装備品はシャツとパンツのみ！だって一番楽なんだもん

なんかおっさんが可哀そうな人を見る目で「はあ〜…」とため息をついてらっしやる！

やめて、そんな目で見ないで、俺は露出趣味があるわけじゃないからあっ！

「その様子じゃ服は…持つてるわけねえよな。ちっと待ってる」

そういうとおっちゃんは御者台のほうに行き大きめの袋をあさり始めた

てかよく見たら馬車なんだなこれ

「ほれ、とりあえずこれ着てな」

と言い手渡されたのは布の服と布のズボンだった、俺に対して大きめなのはこのおっちゃんの私物だからだろう

あ、ちよつと涙出てきた、おっちゃんイイ人や

いそいそと着替えをすまし、ついでに靴もないことを話したら皮の靴を持ってきてくれた

「でだ、なんでうちの馬車に乗ってたんだ？しかも服も着ないで」

うわ〜い、どうしよう、説明できる気がしねえや

そもそも俺自身が今の状況に対応できてないし

とりあえず思い出せ、昨日は学校が終わってゲーセンよって帰ったのが午後7時
そのあと飯食って風呂入って何か急に古いゲームやりたくなって竜の冒険3をやって
って、そうだなんか夢見たんだ

なんか自称女神様が剣と魔法の世界に行きたいですか、とかどうのここの言ってたけど……

「……え、マジで？」

だって夢だよな？夢の中の話だよな？

あ、神様ならそんなの関係ないか、って大事なのはそこじゃねえつまりこれはあれかい？最近ちまたで流行ってる異世界へ行っちゃうってやつですか、そうですかあれですか

「だんまりだな、なんだ、言えねえようなことなのか」

「いやいや、そうじゃなくって、その……」

山賊、山賊に剥かれちゃって」

「ほう、山賊にねえ」

「そうそう山賊……」

……気まずい、しかも絶対に信じてないよね俺の話、まあ立場が逆だったら俺だって信じないけど

「まあいい、そろそろ城下町だからな、乗ってる」

「いいの！？ありがとうおっちゃん」

「ただし商品にはさわるなよ、もしダメになってたら5年はタダ働きさせるからな」

「ダイジョウブデス、ゼツタイニサワリマセン」

5年間の無料奉仕とか無理絶対無理、死ねる

まあ町に連れて行ってくれるんだから大人しくしてますか

三十分ほど時間たてば大きな城壁と門が見えてきた

おっちゃんの後ろからそれを見ていた俺は思わず声を出してしまう

「おおおお、まさにファンタジー」

正直な話感動した、日本じゃまず見ることでできないこの光景に

門の横にいる警備兵達、馬車の渋滞なんて見たこともない

そして門から出てくる鎧を着込み、剣を持った冒険者に

異世界に移った戸惑いよりも、未知の世界に来た興奮が寂しさや不安を凌駕した

「よし、次の馬車！ライセンスを見せる」

「はいよ」

おっちゃんが兵士に右手首に付けた腕輪をかざした
すると薄緑色のディスプレイが表示される

「持ち物は塩と麦それと壺や皿か特に問題はなさそうだが、後ろに乗ってるのは誰だ？」

後ろに乗ってるの「俺
とても簡単な式ですね

「こいつですかい？新しい丁稚でさあ」

「そうか…ま、嘘じゃなさそうだな
よし、通っていいぞ」

ややこしくなるの嫌だから黙っておいて正解だよな？
しかしいよいよ町か、やっぱギルドとかあんだろうな
どうせなら目指せ世界最強！

と、そんなことを妄想していると

「さてボウズ、先に言っておく」

「何？」

「お前に服や靴を着せてやってるわけだが、俺は商人だ
んなボロの服や靴はくれてやってもいい」

おお、前振りの割には優しいじゃないかおっちゃん！

「でもな、世の中なんでもタダで手に入るわけじゃない」

……つまり、何が言いたいのでせうか？

「服と靴の代金分しっかり働いてもらっからな」

「なん…だと…」

この世界に俺を送った自称女神様、あなたが俺に何をさせたいか知りませんが

しばらくの間、俺に自由はなさせようです……

第1話(後書き)

プログラムのほうが長いとか、
、
、
o r z

第2話（前書き）

カタツムリより遅いですが、なんとか2話目ができました

変なところで終わってしまったのは勘弁してください

第2話

「ほらよ、とつときな」

「おつちや、これ……」

十三が手渡されたのはお金の入った袋だった
中身を見なければ金額はわからないが
おおよそ一週間程度なら生活できそうな資金であった

「先立つもんがなきゃなにもできんだろ
俺からの餞別だ、とつておけ」

「そりゃそうだけど……」

「わかったわかった、それじゃあこう考える
その金はお前に貸したんだ」

「貸した？」

「そうだ、つまり借金だ」

「この年でっ！」

借金という言葉に思わず反応してしまった

「お前がいくつか知らんがそうだ
お前はその年で借金持ちだ」

おっちゃんその言葉に思わず俺は唸ってしまう

上手い、実に上手い手だ

最初のうちに優しくしておいて後で落とす

しかも借金なら金利で設けることができる

さらに肉体的には健康な俺ならばある程度仕事は見つかるだろう

いや、肉体労働ならまだいいが、もし男娼なんてことになったら……

「イヤーーーーッ！まだ純潔でいたいのーーーー！！」

最悪の場合の想像をしまい、心の中だけでは抑えきれず叫び声は実際に口から溢れ出てしまうのだった

「なに訳のわかんねえこと言っただバカっ！」

「ギャフっ」

俺の頭におっちゃんの拳骨が振り下ろされた

「いいかよく聞け、お前は俺に借金をした形になるが

俺はお前を連れて行くつもりもないし余裕もない」

「え……」

「それに俺にだって仕事がある、次の町に行かなきゃならん

だから、またいつか俺に会った時に全額返済してもらおうからな」

「また今度会った時？」

「そうだ、また会う時までいきつちり金を貯めとけ」

そしておっちゃんは馬車に乗って行ってしまった
最後に一言別れの言葉を残して

「じゃあな、ボウズ」

(ここから感動秘話と回想が続きますが中略)

「とりあえずギルドにでも登録してくるか」

商人のおっちゃんと別れた俺は日々の糧を得るためにギルドへと向かうことにする

さて、突然関係ない話となるが、ここ一週間ほどおっちゃんの手伝いをしていてわかったことがある

一つ目、身体能力

実際には想像するほど高くなっていたわけではなかった

握力でいえば元の値に5キロほどプラスされた感じだった

主に俺は馬車から荷物を降ろしたり、逆に運び入れたりしてたわけだが

次の日にはメツチャ筋肉痛になってた

おかしいな、ステータス超強化って書いておいたはずなのに……

二つ目、成長具合

さて、先に言っておいたようにそこまでの極端な強化はさておらず
初日の荷物の降ろし入れ作業により俺の体は悲鳴を上げた

筋肉痛の体に鞭をいれて、この日も作業していた
しかしどうだろう次の日には筋肉痛は治ってるし、
30キロの荷物も片手で運べる筋力と一日中働いても尽きるこ
のない体力（若干誇張表現）

この両方を手に入れ、この時初めてチートの効果を実感した

「ここがギルドか」

冒険者ギルドらしいが、俺には西部劇に出てくるような酒場にしか
見えなかった

しかし冒険者ギルドという看板がデカデカと掲げてあったので間違
いないだろう

とりあえず中に入って登録をしまおう

「すみません、冒険者として登録したいんですけど」

「はい、それではこちらの用紙に名前を書いてください」

そうして渡されたのはペンと紙なわけだが、ここで問題浮上

（この世界の文字ってたぶん日本語じゃないよな）

そう、俺がこの世界の文字を知っているわけがなかった
普通に話すこともできるし、読むこともできる、でも書くことだけ
はできなかった

中途半端すぎるよ女神様（涙）

俺と受付嬢の間にはしばしの沈黙が訪れる

.....

そして恥を忍んで

「………すみません、字は書けないので代わりに書いてもらっていますか」

「わかりました、それではお名前をお願いします」

恥ずい、名前書けない自分が恥ずい

「えっと、獅子崎十三です」

「シシザキジユウゾウ様ですね
すみません、どちらが家名かお教えてください」

「獅子崎です、苗字が獅子崎で名前が十三です」

「ありがとうございます、それではこれより登録を開始します
終わり次第お呼びしますので、近くでお待ちください」

「はい」

しばし暇になった俺はしばらくギルド内部をフラフラと歩き回り見学をすることにした

歩き回ること数分、再び元の場所に戻ってきた

なんてことはない、上の階に昇ろうとしたら止められたただけだ
どうやら二階から上は高ランク冒険者専用らしい

高ランクでどれくらい何だろっ等ということを考えながらボーっとしている

「ジユウゾウ様、ジユウゾウシシザキ様」

あ、名前呼ばれた

そうか英語圏みたいに名前が先で苗字あとなんだ、そうなんだ

先ほどのカウンターに行くと受付嬢が二つの腕輪を持っていた

「お待ちせいたしました

ジエムへの登録が完了しましたのでジョブリングとギルドランクについて説明させていただきます」

はあ、と返事を出すことしかできない

ギルドランクは想像つくけどジョブリングってなんじゃ？

「それではまずジョブリングをつけてください」

渡された二つの腕輪を言われるまま手首にかける、大きすぎてブカブカなのだ

するとブカブカだった腕輪は突如小さくなっていき

俺の手首にジャストフィットする

「次にこちらを握ってください」

そう言われて渡されたのは二つの黒い球体だった、それを両手に持ち握る

すると手の中の球がいきなり消えてしまった

「今渡したのはセーブジエムと言われるものです、これは体内に入った後に本人の情報を習得しジョブリングに浮かび上がります
少々リングを拝見します…ちゃんとジエムが浮かび上がってますね、はい、大丈夫です」

それでは次にこのリングとジエムの説明に移ります、リング自体はジエムを置いておく台座でしかありません

ジエムのほうには本人の情報、ステータスが記憶されておりいつでも好きな時に確認することが可能です

閲覧方法は左右どちらでも構いませんのでジエムをタッチしてください、ちなみに第三者がジエムを触ってもステータスは表示されません」

何て言えばいいんだろう、さすが異世界って感じだな

それではさっそくステータスとやらを確認させてもらいましょうか

セーブジエムの表面に軽く触れると薄緑色のステータス画面が現れた

獅子崎 十三

【レベル】 3

【ランク】 G 1

【称号】 新米冒険者

【筋力】 E

【体力】 E

【魔力】 F

【精神】 F

【器用】 F

【敏捷】 F

【技能】 急成長、 比例強化、 超越、 幻糸

異世界じゃなくてゲームの世界みたいだなこれ、てかレベル3かよたしかにまだまだ序盤だけさあ、いやレベル1よりましなのか？この世界は強さの基準はレベルなのか、これだと雑魚だな俺さらに基本ステが軒並み低いな、体力と筋力が他より一段上なのな理由はわかるけど

技能の部分は大体わかるな、俺がアンケートに書いたチートだろう、ただ幻糸げんしつてのがよくわからんが

「なお詳細な情報は本人と本人が許可した人にだけが見ることができます、それ以外の人は名前、レベル、ランク、称号以上の四項目のみ見ることが可能です

技能の詳細を知りたい場合は、その技能について知りたいと念じることによって詳細を知ることができます」

技能の詳細もわかるとはなんと便利な、正直なところ幻糸に関してどういふ技能かわからなかったらどうしようかと思ってた

「レベルはステータスの合計値の大まかな評価です、この際技能は評価に含まれません

基本的に高ければ高いほど強いということになります」

つまり俺の身体能力はレベル3相当ということだ、世知辛い

「続いてはランクについて説明させていただきます、ギルドランクは上から順にX、SSS、SS、S、A、B、C、D、E、F、G

の全十一段階となり、さらに各ランクごとに1〜10の階級にわかれていきます

ジユウゾウ様はレベル3なのでギルドランクは一番下のG1となります」

「一番下なのにG1とはこれいかに」

異世界の決まりに納得のいかないダビ スタプレイヤーの呟きだった

「ランクの昇格にしましては、体内の魔力^{パス}経路と繋がっておりますセーブジェムによって判断され、適正レベルになると自動的にランクは上がります」

要するにレベル上げなきゃランク上がらんし、ランク上げたきゃレベル上げろってことが

一通りの説明が終わって、眩しいスマイルで「何か質問はございませんか？」とか聞かれたので「大丈夫です」とこちらも精一杯のスマイルで返した俺はさっさとクエストボードに突貫した

ちなみに受注できるクエストは本人と同ランクのクエストだけであるが、階級に関しての制限はなく、G1ランクの俺でもG10ランクのクエストを受けることはできる

「でもGランクなんてそこらの雑用みたいな依頼しかないな」

とりあえず採取クエがあるのでそれを受けることにする
ボードに貼られた依頼書を持って受注カウンター（説明されたけどキンクリした）まで持っていく

「それでは本日から三日以内に薬草十枚の納入をお願いします、また期日に間に合わない場合は失敗と見なし違約金を徴収します」

ちなみにどんな薬草かわからなかったので図鑑を借りました、これも紛失したり破損したりすると金を取られるらしい

思いもかけずこんな世界に来てしまったが多分生きていけるだろう、大丈夫俺たちの戦いはこれからだ

「その前に宿で部屋とっとかないとな」

第2話（後書き）

感想や意見、修正箇所やアイデア等お願いします

第3話（前書き）

短いですが、なんかもう短いですが

でもこれくらいでトントントン行ってしまふのが自分には合ってるのかも

主人公の技能については次回説明しようと思っています

第3話

「グウルウウウ」「」

三匹の一角狼ホーシウルフがこちらを睨みながら低い声で唸る、だが唸るばかりでこちらに近づこうともしない

理由は簡単、奴らは俺の糸で拘束されているからだ、そして俺は軽く力を込める

「成仏しろよ」

ギユツと糸が喰い込んだかと思うとスルリと抜けていく、そしてポトポト生き物から肉に変わったものが音を立てて落ちていく

生物を殺す、ということにあまり拒否反応はでなかった、それはもしかしたら糸を使っているからかもしれない
だが換金部位を採るためにナイフを使い肉の感触を知っても吐かなかった、ただ漠然と生きるというのはこういう事なのだ
と理解した耐性を持つて一番の原因はじいちゃんの家に行く度に鶏を捌かされたせいだろうけどなっ！

たぶん人間だったら躊躇するだろうし吐くんだらうなあ、トラウマにはなりたくないけど

「さてこれで十本集まったか」

とりあえずクエストを終わらせよう、一週間なんだかんだで時間てのはすぐ過ぎてくんだな、と少し考えたところで現在のステータスをドン

獅子崎 十三

【レベル】 8

【ランク】 G 7

【称号】 新米冒険者

【筋力】 E

【体力】 E

【魔力】 F

【精神】 F

【器用】 F +

【敏捷】 E -

【技能】 急成長、比例強化、超越、幻糸

といった具合だ、ギルドランクはG7になったしレベルも8になった、ステータスも上がったらしい調子だな、と普通の満足してもいいだろう

だがしかし、殺してきた魔物の数は五十を超えている、本当なら今頃レベルが20を超えてても不思議ではない……はずだ！

と言うことで疑問を受付嬢（ラティナさん21歳）に聞きました、彼女いうには

「そもそも魔物を倒すことで肉体を強化することができるのは倒した魔物が内包するマナ（魂みたいな物）を取り込むからです、取り込んだマナの強さに自分自身のマナも徐々に引き上げられるわけです

ここで問題になるのは引き上げると言うことです、たとえば敏捷

Fのマナを持つ魔物を狩り続けることで自身の敏捷もFまで上がりますが、同ランクになってしまうとマナ同士の力が同じになってしまい引き上げ現象が起こらなくなってしまいます、よってステータスを上げるのが目的ならば自分より強い魔物をガンガン狩るのが一番です」

とのことですが、小耳にはさんだ情報によると筋力D+程度の能力を持っている魔物なら腕力だけで人間を殺せるらしいつまりステータス値をAやSまで上げるには、まあそういうことだ、簡単に想像できるだろうがほぼ不可能と云っている
能力値の平均がCランクのモンスターが出た場合は軍でなければ対応できないらしいし、Aランクなんかが出てきた日には近隣の国どうしで臨時に合同軍を結成して対応すること

ちなみにこの話を聞いた時「常識ですよ？」と残念な子供を見るような視線を向けられた

ちなみに筋トレなどで頑張っても最大でE+程度までしか上がらないらしい、それが人間という種の限界だそうだ
労働でEランクまで上がった筋力と体力をこれ以上自己鍛錬で伸ばすのはほぼ不可能らしい

「思った通りにはならんもんだな」

などと愚痴ってみる

「何を言っているんですか？」

「なんでもない、それじゃあこれ確認お願いしまっす」

そう言っつて角の入った袋を渡す

「……はい、確認しました、それではこれが報酬となります」

「どもども」

渡された金を受け取り、俺はギルドを後にした

今日の飯はどうしよう、少し豪華に行こうかな

ということ俺は最近よく行くようになった店に足を運ぶのだった

冒険者ギルドから臨時招集がかかるのはこの三日後だった

第3話（後書き）

誤字脱字、感想や意見お待ちしております

むしろドンドン来てください

第4話（前書き）

1000文字行かなかったとか八八ッ！

第4話

「これはまた…」

見渡すばかりの人、人、人。

見える範囲で大まかに数えてみたが百人はいるだろうか、見える範囲だけで。

もしかしたらギルドに入りきらずに外にも冒険者の群れが出来ているかもしれない。

王都でもないのにこの町は結構賑わっている、町から見える城は伊達ではないらしい。もっとも領主の顔なんて見たことないけどさ。

それにしても、臨時招集とか正直めんどいです。強制じゃなけりゃあ絶対来ませんでした。

だって厄介事とかに関わりたくないもの！十三心の叫び。

だが日本人としてのSAGAなのか、俺は上からの命令に逆らうことなく指定されていた時間の十分前にはギルドに到着していた。

ガラガラのギルド内で時間になるまで座って待っていたが、集合時間から五分を過ぎたころから来るわ来るわ人の波、この世界の人って時間にルーズなのかね？それともイタリア人気質なのか。

「諸君今日はよく来てくれた」

よく通る渋いギルド長の声が聞こえてきた。

「君たちがギルドの招集に応じてくれたことを私は嬉しく思う、レベルが上位のものから五人づつこちらに来てくれ」

そしてギルド長の後についていく高レベル（と思わしき）方々。
てか、俺ってかなり後になるんじゃないかな？最近登録したんだし。
自分の番は相当後だろうと（勝手に）決めた俺はその場に座り込み
魔物の換金部位の書かれた本を読むことにする、暗記しておけば便
利だからだ。

*

*

*

ぼて、っと倒れた拍子に目を覚ました。

一体どのくらい眠っていたのだろうか、気がつけばギルドから溢れ
とうほどの冒険者たちはすでにいなくなっていた。

「おや、目が覚めたようだね」

渋い声に導かれるまま顔を上げるとそこにはギルド長がいた。

「全然起きる気配がなかったから君の順番は後回しにさせてもらっ
たよ。さあ君で最後だ、ついてきなさい」

「あ、はい」

寝起きで頭がよく回らない俺は言われるままギルド長の後について
いき、奥の部屋に通された。

部屋の中にはフード付きのマントを目深くかぶった三人がいた。

第4話（後書き）

就活が絶望的です、誰か助けて……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4774s/>

獅子崎十三の日々

2011年7月24日23時57分発行